

鮮齋永濯画圖

編



初

假名垣魯文和解

賞文倭傳氏蘭格





48-8004

米國前
大統領
格蘭博倭章
編初

假名垣魯文和解
鮮齋永濯畫圖



下



中



格蘭氏傳
 假名垣魯文和解
 鮮齋
 永濯画國
 初編上三卷
 辻岡屋
 文助梓

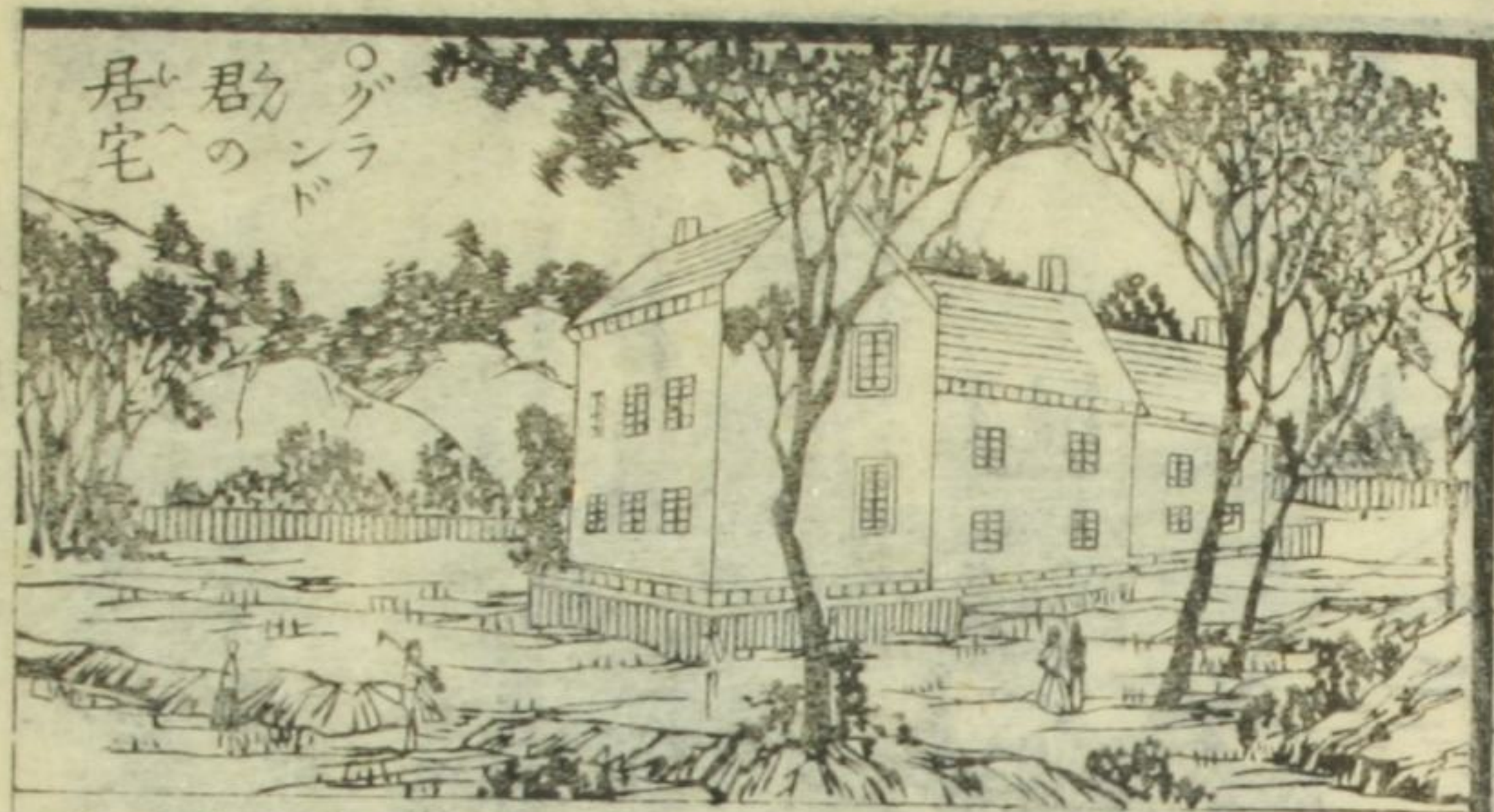
北辰の其處ろよ居て衆星之よ迎ふが如しと抑々
 米國の旗章ハ星の數々衆合て獨立共和の基ひと開
 き質とりみされを創業者盛頓君と始め世々統領の
 任乏しゅうぬ中前の大統領グラント君を彼國古來
 未曾有の大權と衆庶より附與せしむる偏此君が
 仁義慈善の徳望は依てあり這般我國は來航の
 ろ出麟來鳳の祥瑞は猶是より日米の交際
 いよく親睦の吉兆なる事顯然に里故は名公の
 傳と掲げ美奉と童蒙婦女子も知らせま欲く此
 題号と倭文賞と称え侍り

明治十二年第七月中旬

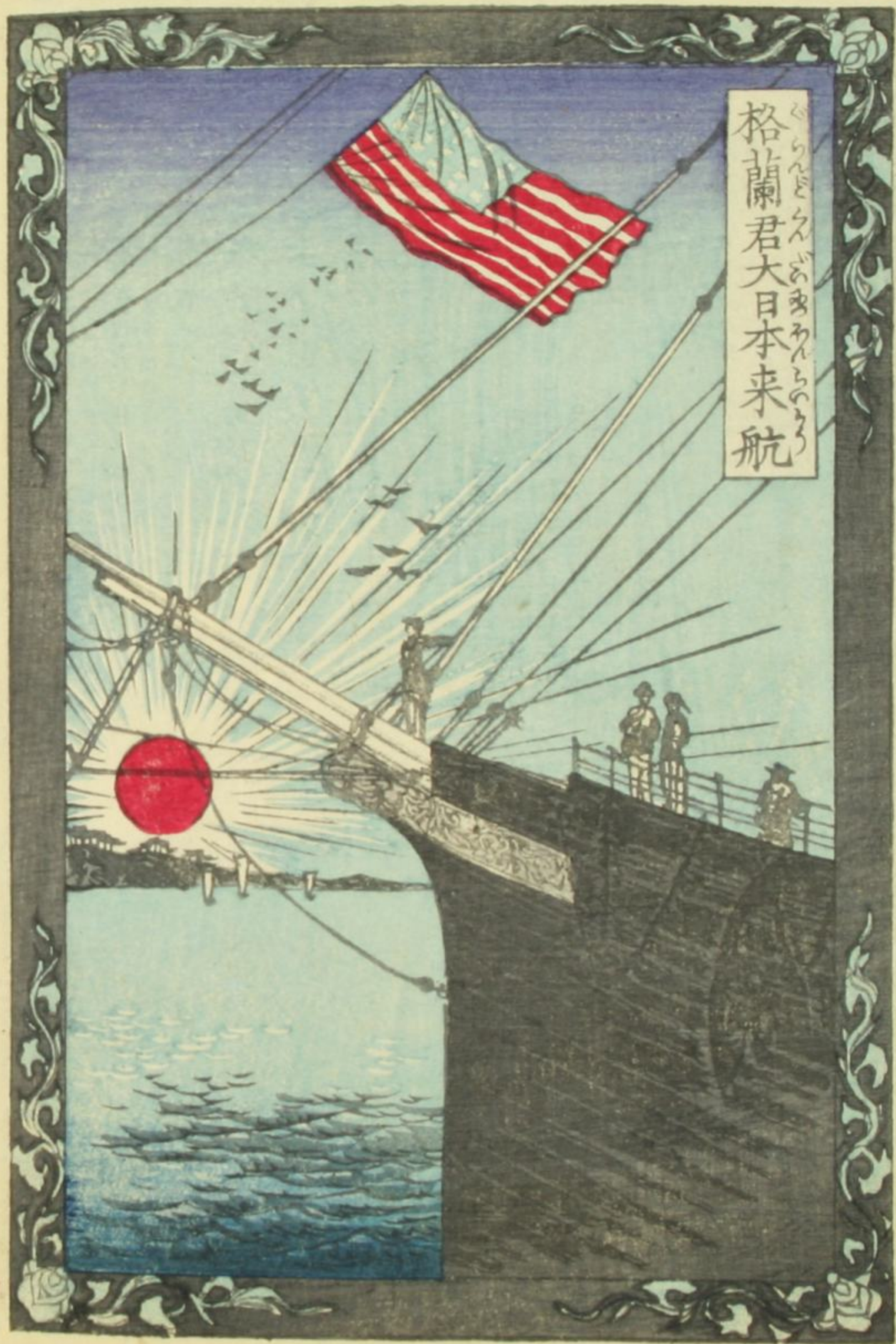
假名垣魯文記

格蘭氏傳四二





格蘭氏傳倭文賞初編上之卷
 大日本 假名垣魚文和解
 今より八年前の頃吾著せし小学の世界
 都洛と云ふ書より北亞墨利加の景情を
 再び茲に抄写し挿切畫を達しその洲
 のその開闢を解明せん性古ハ亞細亞あふ
 りウ政羅巴との二洲のその外は絶て国
 とハあき者と思ひ廻らる地の形は球の
 かどと究めてハ東と西のその間ハ土地を
 き事ハ何と云へば月再曼国の矢文者コ
 ベルニクスといふ人西よりわうひて船を走
 せ竟る新地を遠く見つけり一後ハ伊
 右利亜のロンビユスと云ふ者大小



格蘭氏傳

格蘭君大日本來航

つぎ大将と
仰ぎて英國政府
と戦ひさうもの

軍をうち
破り全く
勝利を得
程は今
英國も敵まりの
からさく今より九十
七年幕彼の紀元
一千七百八十二年ふ



ワシントン

と六号けーあり史
より十
代目の
文統
願渡
左のユリセス
シムリンブランド
氏今より
六十八年幕四月
二十七日ふ幕國のオハヨー
州モントポイント。フレ

英國の支配と通じ
和後ありて後獨立の
國とあり衆と合して共
み治める政事と定めり
投票の多き
者と四年
選りの主宰
と定め此時
ワシントンの大
功ありより所ち
大統領に仕下り
此より國よく治りて
その勲を華盛頓



英將

ガントとの地よて生れ
給ひぬその治生の時より
あそ尋常の赤雲ふ
変
りて
形體
も大
きく
重なる
一費二百
九十二目
ありと
ぞ



ある者の
眼は細と
ある細者さの

成長は速い
思ふは深く

▲と家よ
庭の一挺の
姫籠と推入
来りクラド
君のさすお添
その弾丸は
まわすおふ
たる弾丸雷
のまると

クラド君父
は夜
の
暇か
ま



耳に入るも
更なる事
今こそ年二葉よ
満ちる父の
ジエツジルミト
グラント氏も抱
うまの家の外よ
在る時迄お切りの
少年がクラド
君とち見やり此初
児への心さふその心さ
物お替りくるとは
愛う嘘うイデマけ

きよせの面を
都そびま
さし今一
放さん
をふ
さるふ
父を拾
彼の
少年は
僕へお
冬うぬ
まは
その
まの



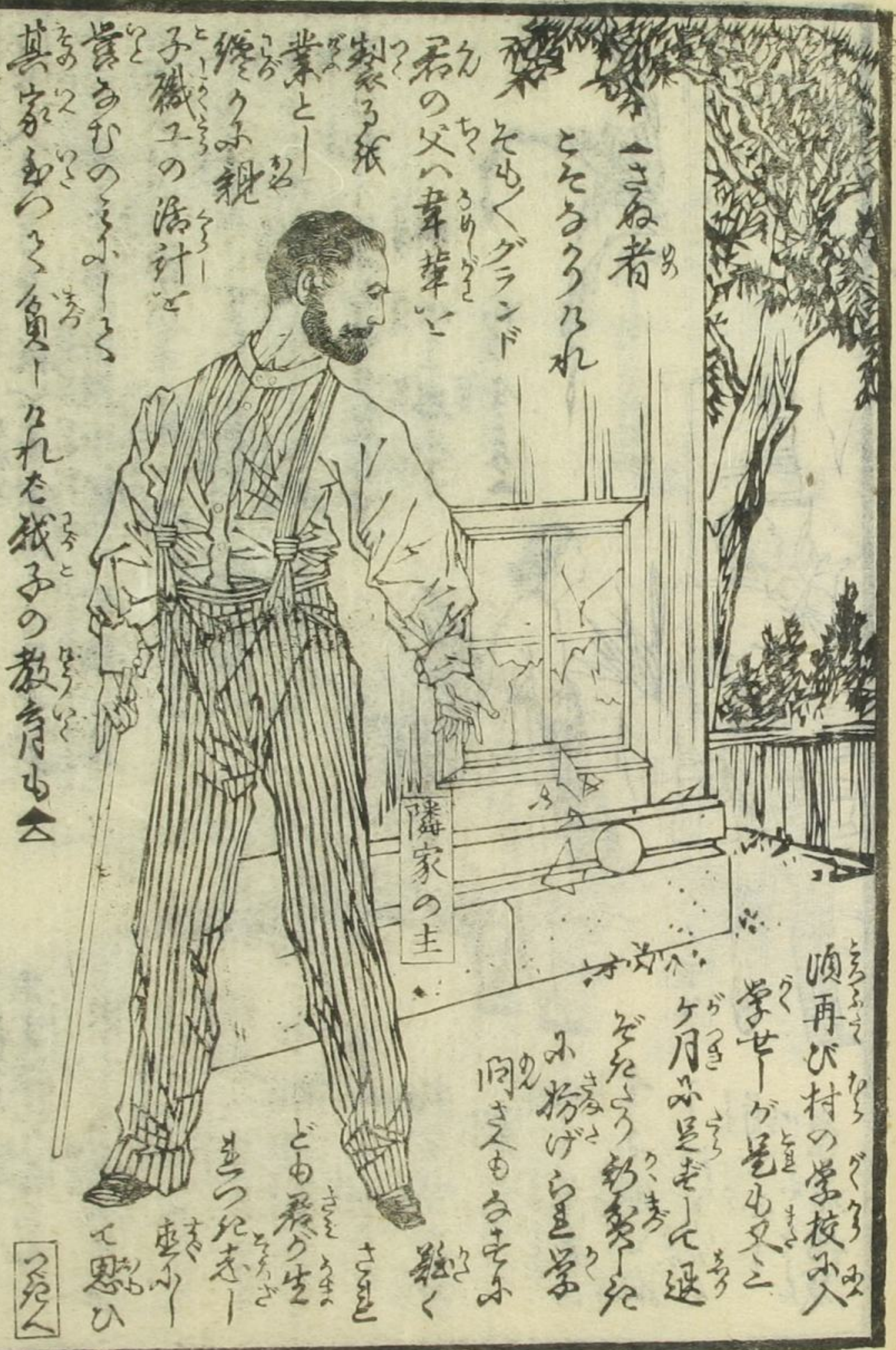
此郷に入来り
 其業を
 観物
 といふ
 其行せしめ
 グランド
 君へ
 父抱ふとその

▲海へ舟をいせしと
 去程小荷物らるるを
 是へ一頃一月我家の
 迎候せ給と物
 ガー遊び
 戯ま身
 家ト過つて
 隣りの
 家のガラス
 障子をお
 毀ちし小聲を
 後悔の作ありが思
 案と成しその家



場所に入て観る
 うち彼処の馬と
 指さして笑みまん
 とこゝろを父い
 曲馬柳
 み切み
 をうその
 馬よふと
 ちるふグランド君へ
 歡喜の笑顔
 作りて餘さなく
 馬のそびらみ
 股がそあまを

入りま個み
 射ひあそび
 玉ふりく謝
 ろやう我我
 むれみこ
 より
 貴家の
 障子と
 打破りたるを
 羞の罪人重
 じびらみ道
 ちのまが
 不
 貴彩ら



一さぬ者
 ことろろなれ
 そもくブランド
 君の父の草草
 業と一
 子職工の活計
 其家おのる負一なれを我子の教育も

隣家の主
 頃再び村の学校へ入
 学せしが是も又二
 ケ月ふ是老一七退
 ぞんようお勤り
 小務げらるる学
 向さるもなまふ

どの君が生
 立つた志一
 座り
 て思ひ

各直則式專切上



つきをたからス
 障ふと購ひ求め
 この損失と僕人
 べんまのゆをゆし給れと好ふ
 多蔬一町寧み射入るふ高
 家の主個も小思し似知さるは
 届た方ととも小感ト異儀さく
 その飛とゆるせりとを家ふ
 ブランド君の天質
 蛇一すみてその
 氣のう此郷の観
 精児多
 と縁

ブランド
 去る分あらぶブランド君その
 年四歳始め此郷の
 小学校へ入り
 うど学費お通
 せ家経
 多く学校
 と速りてあり父
 が行統
 らぬともその職業を
 女傭ひて六六年を
 空しくするは速く
 九十一歳の冬の

入る事柄と事途をひるぐま
 の専任とを多く而して魔の苦難と忠
 ひせふの七格びの八紀の時をささぐんと
 屈する意なくもかく剛の抗をささぐ
 年十七の春と迎へて此時大志と
 奮ひ起し父をひきつゝのやう
 私一心と思ふと
 あり今より



生涯を送らん
 あり依傍ふと父
 ば又何とりのと
 仍末の業とまら
 や脚蹴取つと
 田南より出る
 物と市小賣
 買まらる
 但一萬巻の
 書ふ眼と極
 一理を究め
 道とふ
 業者増減

心算とほ
 るを此世
 流るるを
 先と死とを
 みぞ父を
 あとと母を
 汝ち父が
 業りの業
 ろる草履
 世の世



の人とあつ
 此時グラス
 ド君同ふ
 意して若
 其の田地
 細小耕と
 農業ふ分
 可なり地
 小作の目程
 一生を送
 まり又十
 あり又十
 盤と



△この地より
戦ひとを閑た
る此戦事と
な格あは此より

つき
る母一が此米國と望其牙國と境果倫より葛藤と
生ト殿よ公端を閑らふ及ひ格蘭ト君ハ奮然と
常の勇氣と一層勵ま一大将リコン氏よ

後ひて西の方メキンコふ
出陣一翌年六月

八日を修く
パアルトと

重困ふ
淵入り
をむも
速くも
更ふ路
りも亦屋
るふあり



大小十は城グラ
ンド君の勇極
毎戦の軍功
比類なく
中ふも同
年九月
二十三日の
モシテレー
の連戦之日
打續きたるその
中ふ同氏ハ無事と
激しく指揮を一敵の
中後へ突入りたるふ

グレド氏

困強極まる
場合ふ及べ
と同氏ハ一
發るも色なく
士を勵進八方
よかけらう
既二月ハ
とまら頭
赤智の名馬と引を初と
看るより引まのたりの足と
鞍よりけたりめをめて急襲と
ひた欄とひと頼めるとと
しるが者どもつけとを

つぎ 追て直ちふひうらち敵軍の困る成
おもひの衝破り難なく味方の本営み
達せしと接けの兵とをひいて
再びあまのの隙と
ゆるりて及して世の
幸あまぬ功績いど
急いへば是より昇
りて大尉に任
その名は遠
近に東き
たうさる程
ふグランド
おんめさしこの



グランド君

大縁組の約束
あつてあま

職まわじ
地よそ
の式
の職と
輝いて
近傍み



戦ふ
鉄まう
その後ゆ
陸軍ふを務一星
霜十一年のその乃
いささの事不勤勞
せーが二十之の時七月
三十一日よその職を辞し
家よ帰りて農よつけり
是より頼同氏ハジントルイと
久る地の大商人フレデレック
テンド氏のむまあシユリヤと
土地
を求め
春ハ
耕
秋を
専ら農
業を事と
せし
不仕
合せの
打續き
幾平々の
資本を失
るひ

つき斯てハ果トと
 思ひと廻ら—又イルリン
 及びガヤレナとのみ地は移り
 幼多死頃より父は習ひ—まゆ
 華を造りてその家と潤わ—年
 二十九小をるまを空—
 口と糊せ—グ竜
 昇天の時ある
 うる西曆一千
 八百六十一
 米國織クニツノ
 分大強動こそ起り—此強
 礼ハ合元國南於の端品北

ツユリヤ

此時クラン
 ド君ハ
 僅うふ
 全戸の
 煙り
 わる職
 尋常

大募らん
 と同年四月
 十五日此令と
 普く國中ふ
 傳ふるふ



新よ新色て
 掲せんと
 旗と奉
 りと
 園

▲その時の
 大統領リン
 ゴルン氏へ安
 ね奉ふ思ひ
 急ぎて兵と

グマド氏

奮つて遠くも
 近郷の同志
 と招き同十
 九月己未一
 園の義つ

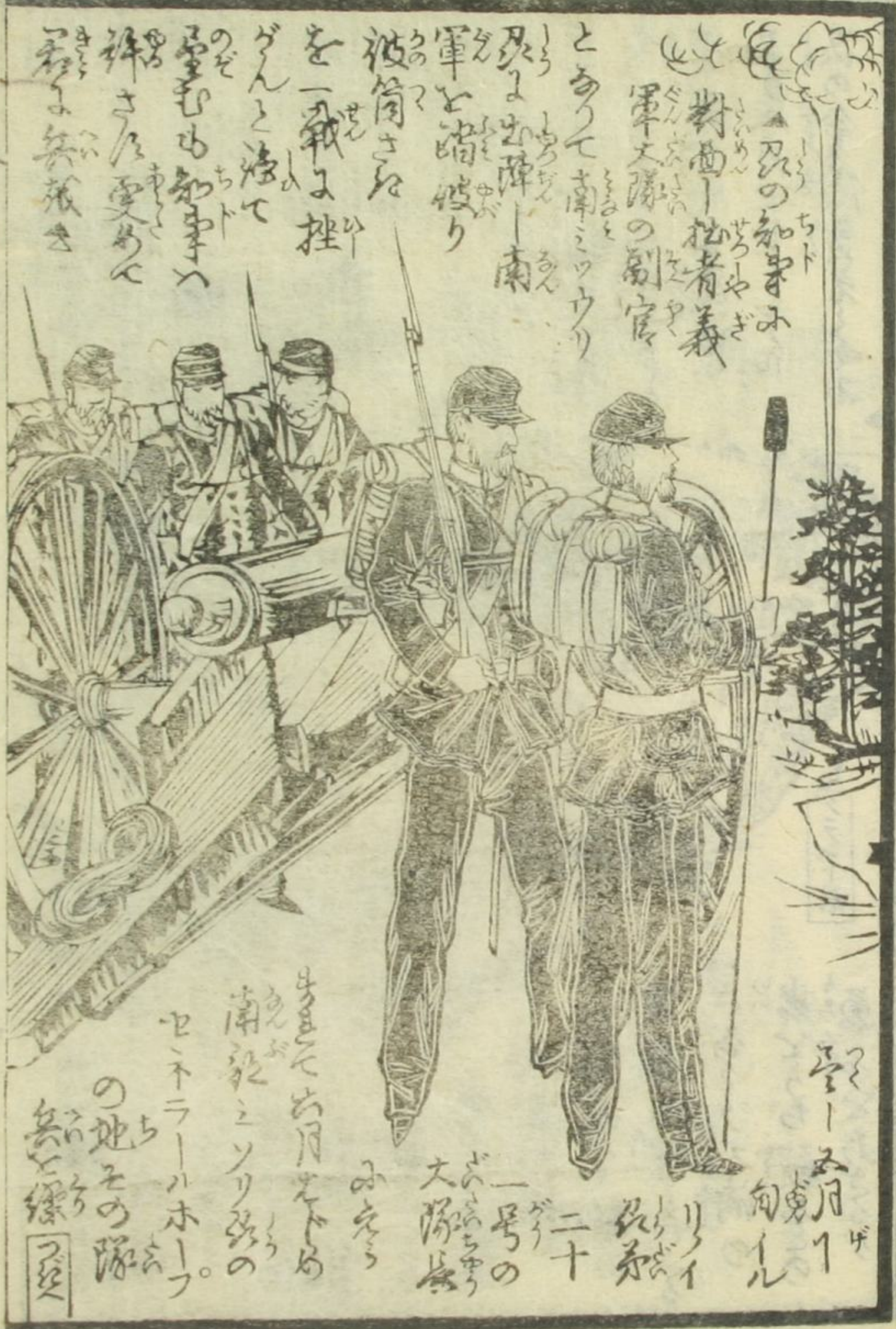
たま
 家を
 保魂
 の高
 矢祐
 大い
 家を
 奮つて
 遠くも
 近郷の
 同志と
 招き同
 十九月
 己未一
 園の義
 つ





つぎ 軍と
あま立此
人々軍の
進退敵
攻守りの
綱練と教
示して出
の月渡違
待ひたり
その
中みグ
君の此

大徴
と命せ
君の已
おまの
間と胸
溢る勇
死とあ
小花び
雨よ
兵と菓
かろ
か



及の知
對面一
軍大勝
とありて
及よ出
軍と踏
被筒さ
を一戦
をんと
堂む由
祥さる
君の無

聖一
五月
旬一
リソ
兵
二十
一
大
ふ
セ
の
兵

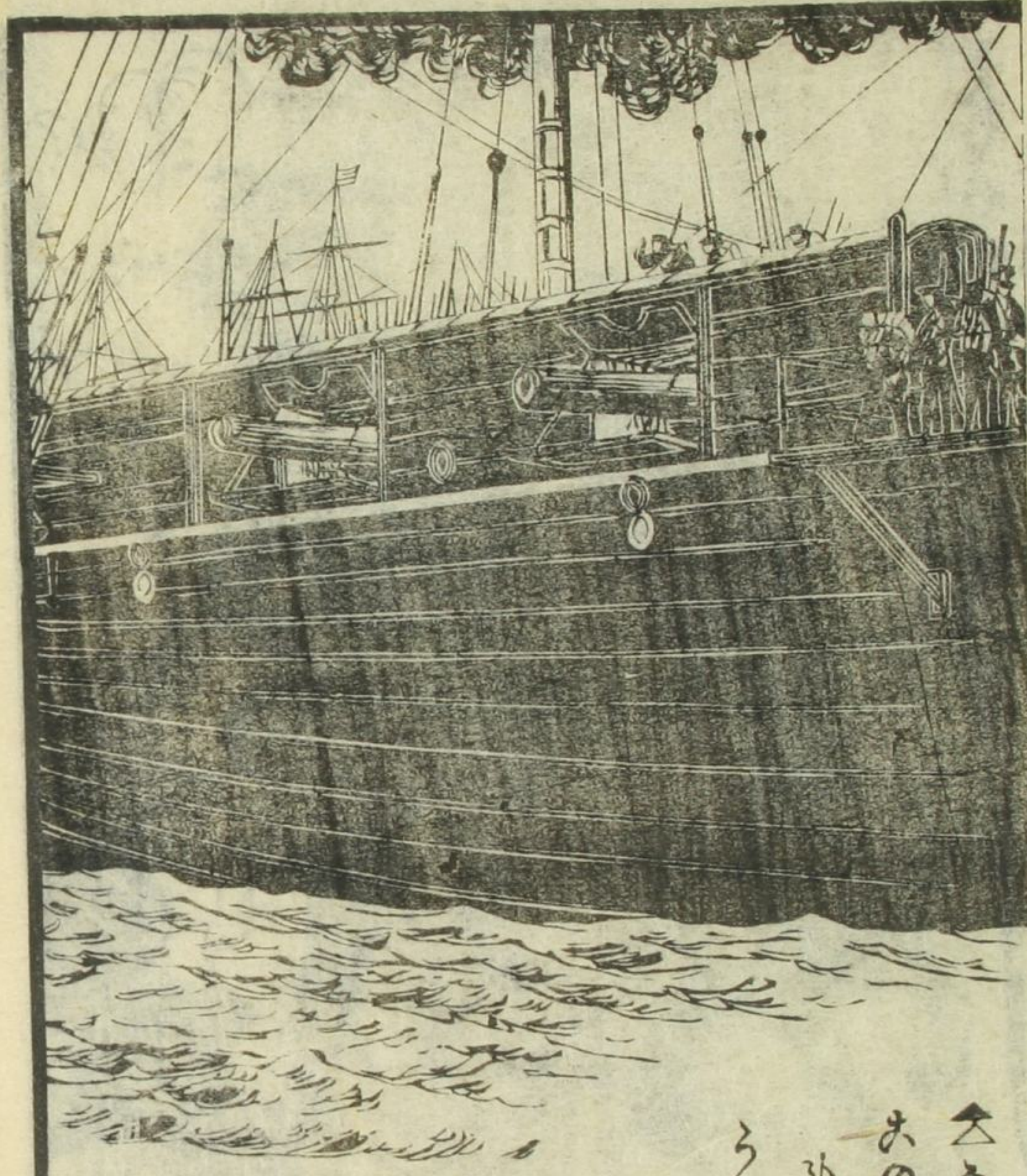
とき 紅ひの霧雨と降らまうと疑がま
 あり一勝負のふさぎに南軍の砲隊の
 時こそその世と打違ふ大砲は粗い
 込めても敵の砲声はゆふたぐん
 もなく忽ち小軍の塞は危敷りまじ
 ろぐにまみ殺るの兵頭上とそらへそ
 斃はとれはさをも別乳の小軍ゆ
 りくさぬと降らやと南軍一度小攻め
 とせて息を継せを標立らし
 さまが勇極比類ある
 グランド君由兵士の
 礼とふ

一先此場とありぞ
 かんといと先小引
 活けてそらへを纏め
 敵をさち退け
 練子隔らう
 たると砲隊一岡
 近た敵の退
 拂ひぬく
 遠く
 退を

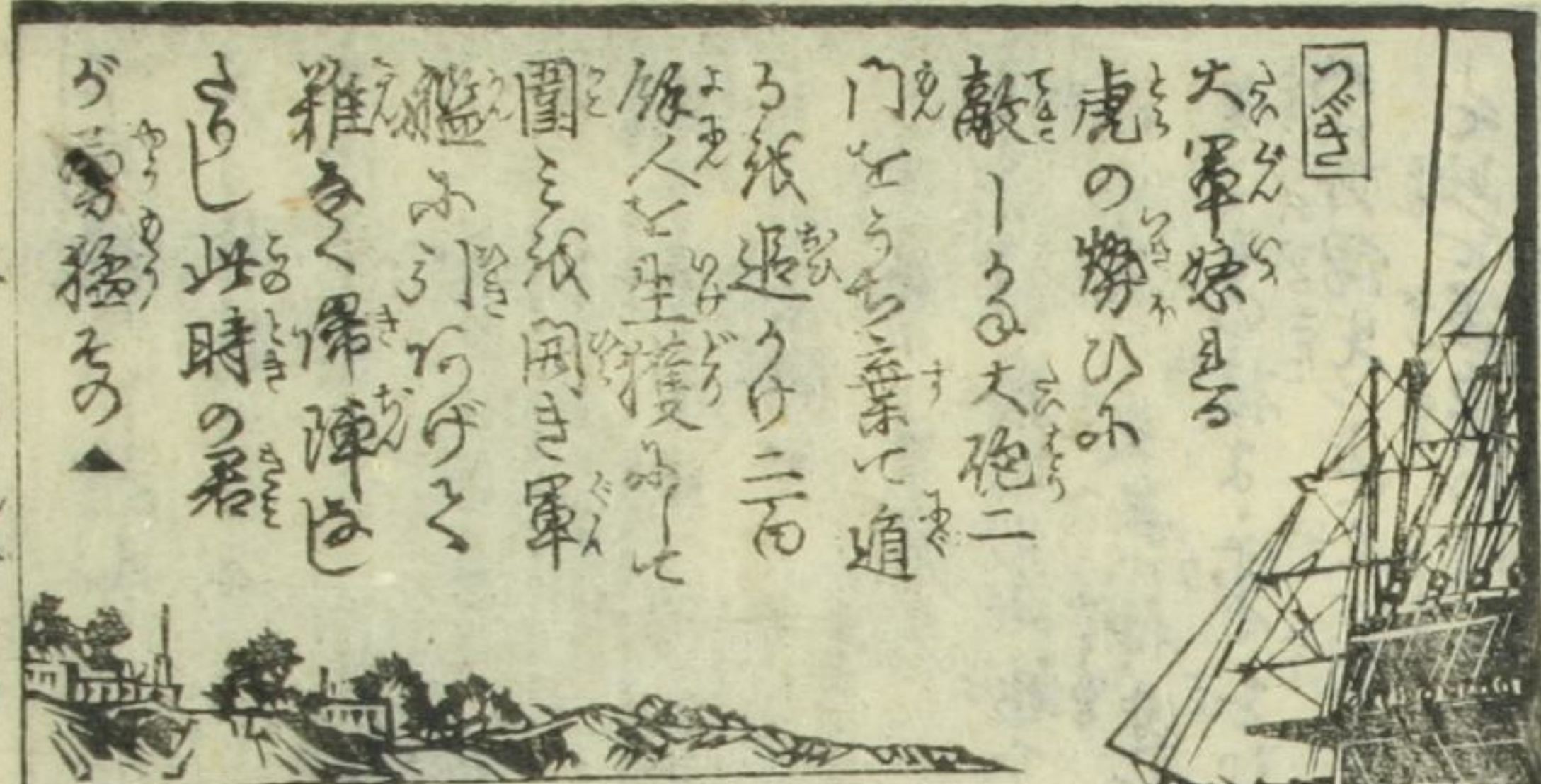


又右側より傳切中

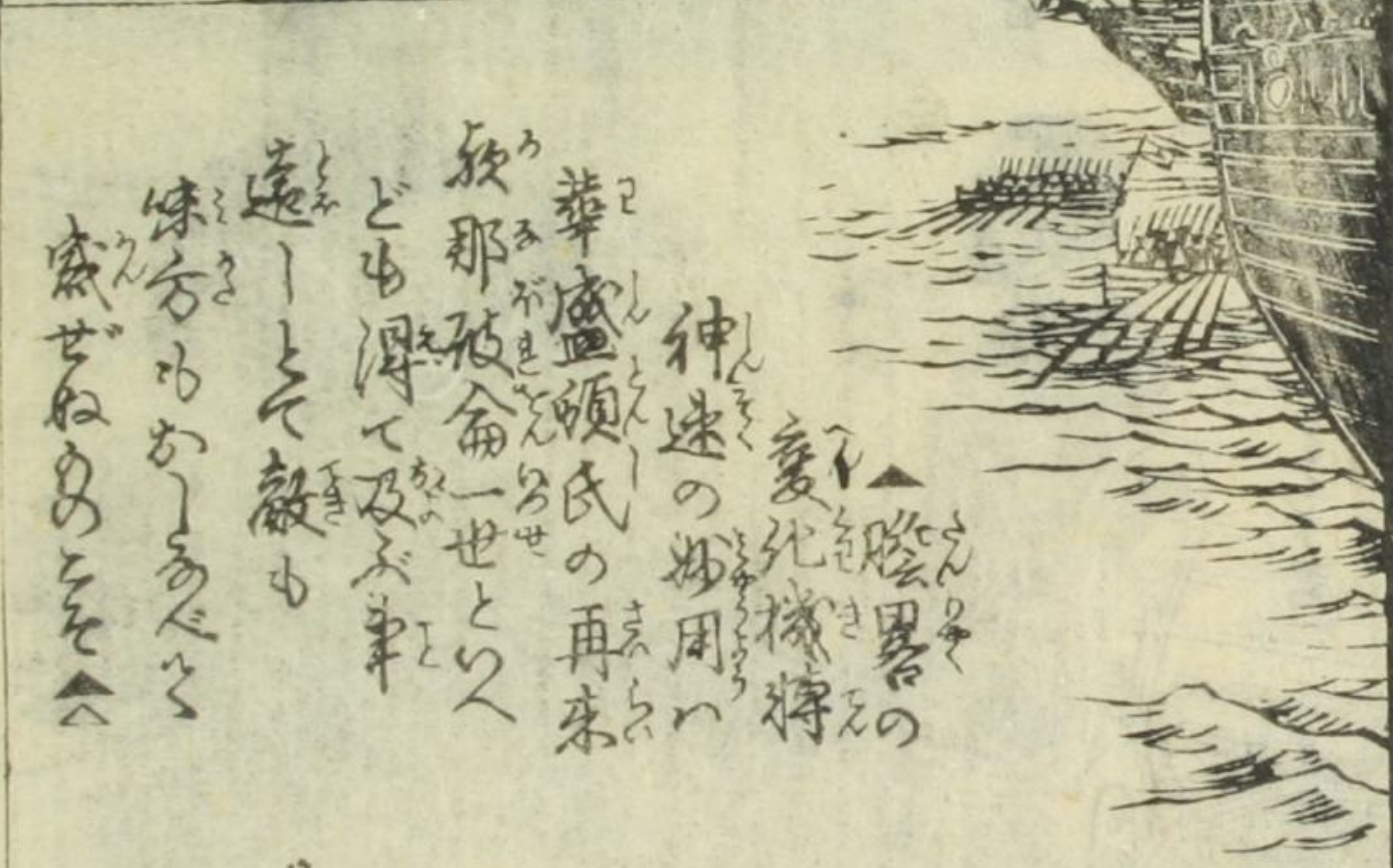
道は
 身は
 補は
 兵は
 身は
 補は
 兵は
 身は
 補は
 兵は



大なる船は
 大の故に南軍
 も臆し退
 らしむるは
 南軍の
 死に
 者と傷
 人の六百
 二千二人
 小軍を
 算を其



大軍は
 虎の勢ひ
 敵一丸大砲二
 門をうち棄て道
 ろは退くは二百
 餘人を生獲めて
 圍を破り南軍
 艦ふりつげさ
 難き帯陣は
 さし此時の君
 が勇猛その



▲ 隆景の
 変化機將
 伸速の如用
 華盛頓氏の再来
 彼那破命一世とい
 ども得て及ぶ事
 遠しとて敵も
 味方めかゝるる
 威せぬものを

死に敵は
 二十人不足
 程ふその翌年
 の春を迎へ
 グランド島の
 此とたみ大將
 ペルツク氏小
 上書し南
 部ポールトヘン
 リーの地を
 進撃し敵
 の右の



つぎ
澤て垂ちふな場を率一
テニネシイ河の畔よ
そひ勢ひ込で進む程ふ
其やうへまで返ぬま
あやく急げども心よ任せま
道えうやうを運上るふ

△防ぎふ
からとそせーぶさそく
あての枝くこ紙いぎ
グランド君のペンリーを
海軍ふさたぐりせう

△あ
らふ
あま
の
と
は
△

海軍の兵先きて陥入る
と関へなれを残りをくも忽
ちふ一ツのえうまごとめぐじて
此ホルトペシターと隔つと
六置コンボルランドの西
南との岸ふ浴ふるヤネル
ソシと攻め撃んと大將のさ
づも待まば直ちふ彼処よ押
寄せて二万ふ千の兵馬とあて
十二日より攻くまば二万一千
余人の敵兵北軍襲ひ来ると
関きその近き色の要地と



且其智りと
よ此処ろを尾
非攻めぬん
と乳紙
いち一万
み千のまぐ
と一兵を
敵隊へちち
つ戦ひ少く
劣る且バ新をよ
入智人との心
通り二百を後つて

つぎ 息も絶せぬ
最もむげしく攻む
と敵も必死に防げ
この北軍は千六百の
後明方より又更ふ一
六千人のむらと添
てちうら攻むせむら
と南軍のうらむ者
歳千といふ敵とわらむ
を負死人の二千六百餘人と
を関へられ此ふあつて
南云いそむと



▲ 捕りの
敵は二万
に千六
百二十
と此大勝
利を得て南軍
の勝ひまはく震ひ
あつたケンツキイ
とテネシーの両軍

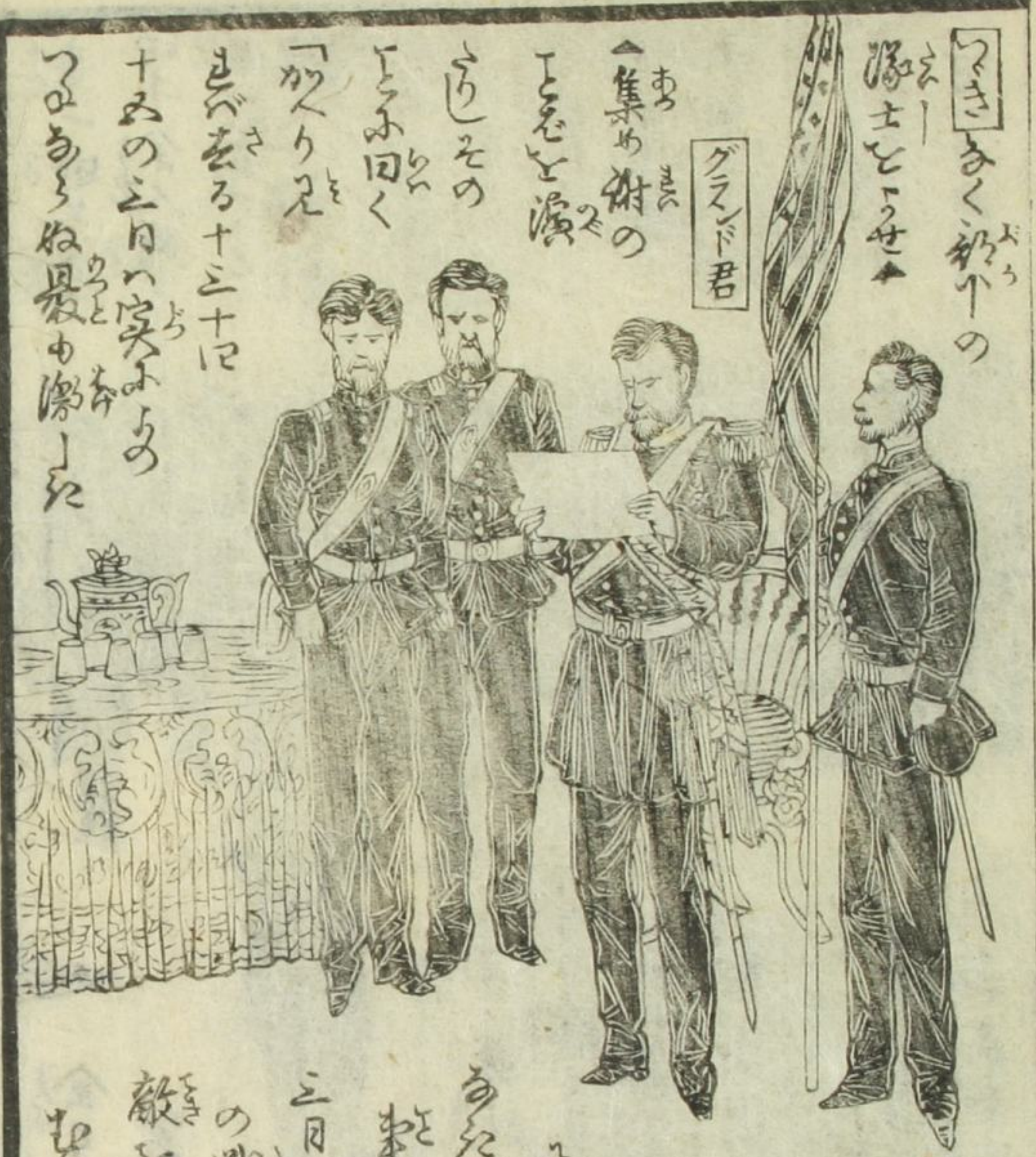
棄て逃る者
に千余人残る
其いそむと
管門と出た隊
伏せし此戦ひ
ふ北軍の討死
を負ふ二千ふ
満てを敵の
兵業とち捕
するに大砲
六十ふ門小銃
二万四千六百



全く味方の名の内
とら史のまあるを
此意の大
川へ北軍
のいそむ
より運送船も自在に通ひ
この戦うひの大勝利もま
ふ北軍全勝の幸先とを
わらむはれ新レグラント君
へよのつひあつねから攻
めて此大勝利を得たり
ふむび何ふとある者

つきまに船中の
隊士とてせ

「集め附の
工を急げ
しその
しふ回く
かくりえ
とびをる十二十日
十二日の夜よりの
つらぬぬ最中激した



●雲ふ似る由
足とわふ留
むるに然いせ
今や遠く外に
敗退するまゝ
み緒君の天幕の
あは所ろふ居るも
料とせむらうさ
二月ふさう連つて
の戦ふも由傷んで
敵と遠くかりまゝ
むらん人せむらう

戦ふひありしと緒君の
赤らつるあしぬからん
勉めて弾丸の雨の注がれ
中み緒君とひたす
遂ふ此大勝利と収むる
至りし大將たる己は
最も喜ぶ事ありそむ
此ポールド・ネルソン
とて地気候は順ふ
しと且つさも甚き
あはし緒君のあはし
橙くぞ勇と奮つて



入るに実ふ
満足のありと
ゆふにそむ
南軍へ戦ふ
者山のてく
隊の士らひ

諸隊長



お人の気象を引き
あは実ふ此さひの
正に大勝利を

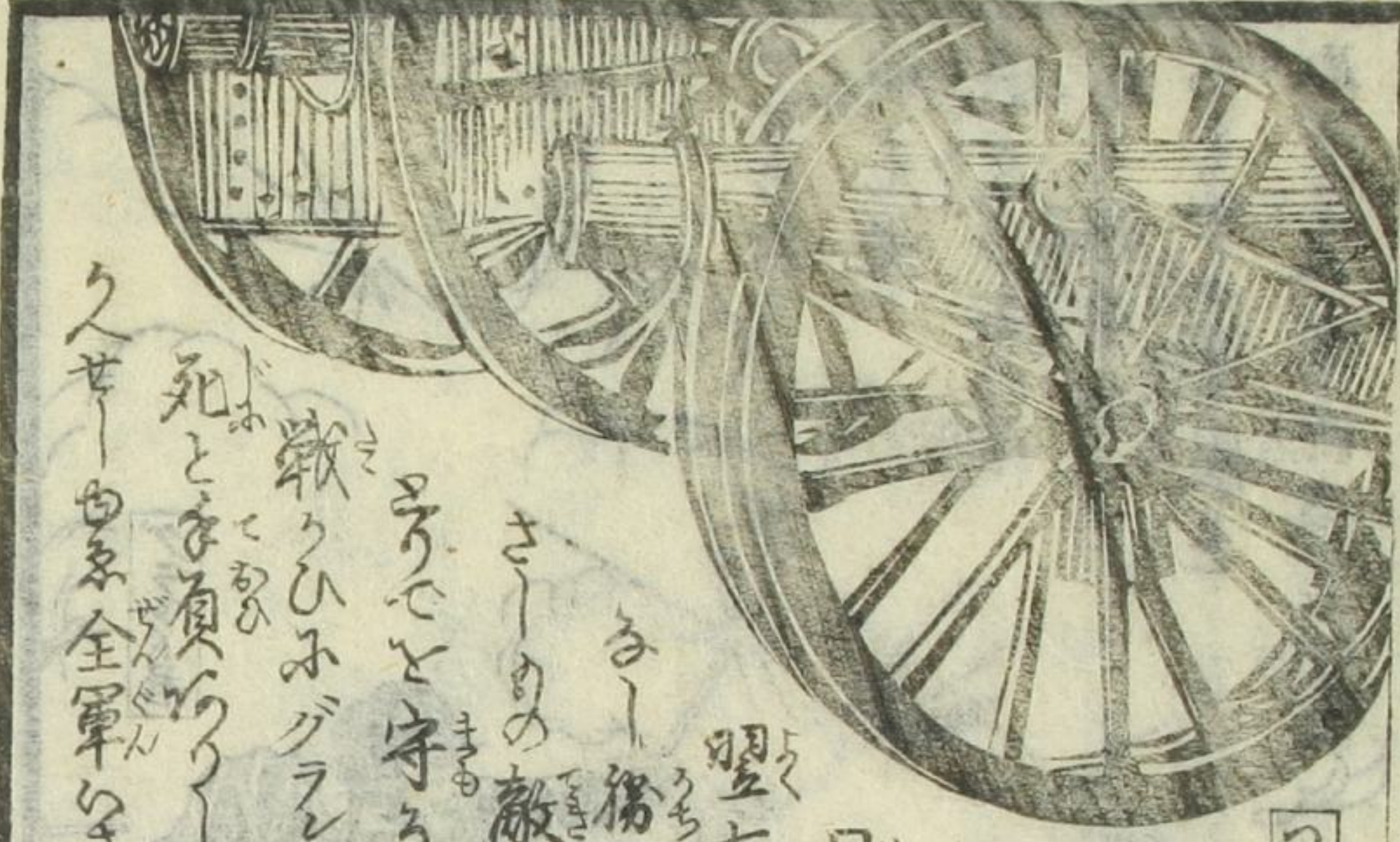
「き 稀ふるを知るまで
又今度のどに生捕り
多き國をけりて以来
いまださうりさる処るあり
是もあふ富地ハツの
大ひある戦場の名と
後の世よおしるふも
人と電一自由と電
さるるらるる者ハ洋の
東面と倫せむかあるぞ
備君のりよと其
さるふさむだきあり」

▲ゼネラルボ
イル氏グ
四万の板云
の来るど
待つみ此年
るやも敵よ
國へさるべ
此もまふ
かあせと
グランドグ
と取ら△



「此功ふよりグランド君ハ
提督ふ進を罪りテン
ネシ一河の終兵を指揮
はるるを命せらるるれハ
三月下旬その西岸ふ所あり
南兵のまをむらせるコリンスト
久る地を撃つんとむひなきの
殊とて得ては後けの兵の
来るまでハ必らむ戦ふぞと
と堅く命令あり一と君ハ
二万八千のまをひとと率
してボツボルグよ提りと▲」

△ボイル
の兵よ鼻
あうさせん
と梨風のどと
北軍よ攻くはむ
此時グランド君の兵
おけくみ千人ハ遠く隔ち
たつ所らへ陣をいそぎ
し由を被足通むるのいそぎ
ふたも素より腹組まむと
する事係るまは事
つた



つぎ勢ひふたげまさは是れをこりて
 戦ひひらりふ脱よその日も暮れんと
 さる頃ゼネラルボイル氏に三万余の助
 けの兵を引率してあつたふ北軍の
 早魁は雨を潤うがめだ思ひをる
 翌七日の夜は方より兩軍隊をひらふ
 さし後をうする南軍の備へふ戦ひりりれ
 さしめの敵も堪へる終ふ敷とて引退り堅く
 守りて守るのそ又戦ふの気あまし此と死の
 戦うひふグラント君の一万二千二百七十七人の付
 死とを負ひりり前よ受あひる地と取
 うせし由全軍のさしむびり此よよて終と



近きバコリンヌ小攻を頻う小戦ひとむと
 一由味方の一將ハレッシュ氏又そのを勢を引率
 して後退とあり南軍の右を多く小衝りれば敵
 兵多のドとや思ひらん六月と十月コリンヌの
 營塞と棄て引退るふグラント君の進ちふ
 彼地へ陣とらつ九月十九日よりユーカーを攻
 ちり勢ひもあくかりり此戦うひふ小軍
 の死を負ひるづりふ七百人と十六人又南軍
 の死を負ひる千四百と二十八人と聞えす
 ○去程ふ十一月二日グラント君へ更ふ方の
 精兵を引率してソルマン氏と並び進
 「ミシッピ」の内被ふ打入ボングス「つたへ



各指圖式カド

予きボルグのらーらと襲ひソルマン
 氏ハ西方の精兵とて希の方より
 攻く里一みグランド君の
 向ひ一処らへ幸をひみて
 敵多しは二十餘里をど
 の道よりと彈丸一發もする
 さぐ一とオックスホルドふ
 到着せり此の時南
 於よコロネルモロヒー
 氏と父る将りらるる
 小軍は隊来り一際と
 うるひ小軍の云報とす



▲この年ハ
 三月とあり
 くれは君ハ
 ニシツピー
 一の信云
 とら率一
 ビツグス
 ボルグの
 急々
 まで
 攻めせ

父さるホーリースプアリング
 と父る地と不意に襲ひ小軍の
 右と斬りしふグランド君も
 やむを得ずコリンスふ
 近き地を引あがり
 備前面小向ひハモル
 マン氏も斬る強きふ
 敗走せり同時小同
 所を引まげて此処まで両將軍派を
 とりしその後斬りし小戦軍ハあり
 うどをのぐ一軍ハ多くグランド君ハ
 うつくと心ろ勇まき月日とすまふ



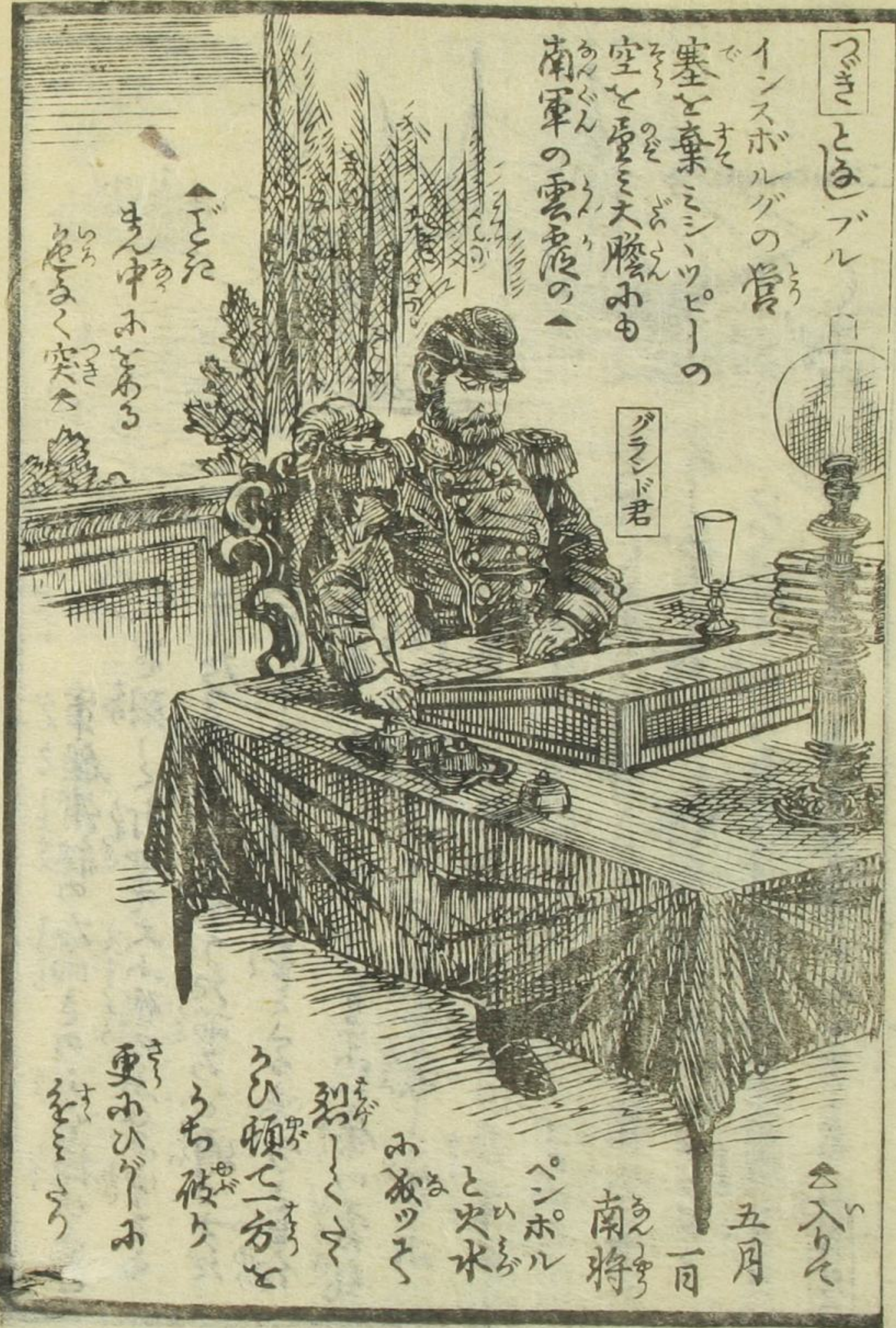
この意ハ
 急々
 の中
 ようして
 兵と進め
 軍艦
 かよび運
 送船ハ河の
 流まふまきひ
 てしむるふ
 此と南軍ハ敵
 の軍艦つて



つま 我らその下を
 びるるとして仕合はし
 と打撃の大小砲を
 あらうけて微塵ふ
 る且とらち殺すその
 音は日ごとくその底まで
 さらた河水忽ち沸き
 入り此砲丸船の中み
 のはべいとうる堅固の
 造ありとも微塵とあらん
 とらふ遠ひ遠くグランド
 君の勢と家一はみ傳とら



軍艦浦和の右向きの方を掩ひて
 を烈しく打撃す大小砲の
 きたる害なくあらうた
 四月二十日陸路より
 互ひの恙があらと視く
 と揚陸の云をのひじみ
 ブルインスポルグに進
 将ペンボルトンの兵二
 を固く守り同將くジョ
 め募りて云を以て此
 つら地よ屯るる一と
 君の斯ときより又万
 一箇



つきとほブル

インスホルグの管

塞と棄ミシッピーの

空と管と大膽ふゆ

南軍の雲虎の

グランド君

△△△

先中ふとある

色よく突々

入り

五月

百

南将

ペンホル

と火水

みぬッ

烈々々

ふん頓て一方と

うち破り

更ふひぐい

を

朝鮮

牛肉丸

許官

名法

大包代子丸

小包代子丸

たんまきの末

天泰丸

色代子丸

出校御用明治五年七月廿三日

笠 地本問屋 錦繪

假名垣魯文

文助

